
リング、ワンデ、ルング。

アオキチヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リング、ワンデ、ルング。

【Nコード】

N1783L

【作者名】

アオキチヒロ

【あらすじ】

私と、携帯電話と、きみの話。

夢だとか自分らしさだとか、そういつたいわゆる「大切なもの」をなにも持ちあわせていなかったから、何かを諦めてかなしくなることも無かった。

だからこんな時、どんな言葉をかければいいのかわからない。

さっき受信したばかりのメールをもう一度読んで、ため息を吐く。

『留学の話、親に反対されちゃった』

たった一行のそれは、夢に破れてしまったことを伝える友達からのメール。

私にはどうしてもかけてあげられる言葉が見つからなくて、結局「元気出して」とたった一言ありきたりな文章を打って送信した。

携帯を握りしめたまま、ベッドの上へと仰向けになる。天井の染みが目に付く。

何が「元気を出して」だ。私にそんなこと言う資格は無い。あのメールを読んだ瞬間、一緒になしんであげなければならぬはずなのに、こころのどこかでほっとしてる自分がいた。これ以上きみが遠くならなくて済む。そんなことばかり考えていた。

返事が来るまでの間、手持無沙汰にメールフォルダを開く。

高校時代あれだけ毎日一緒にいた私たちも、新しい生活に追われていつの間にか親指だけの繋がりになってしまった。いまは大学のことだ。せいじつぱいだ。

もうどれくらい声を聞いていないだろう。文字と親指だけで、いつたいどれくらいのことかわかりあえてあるんだろう。

私が本当に送りたい言葉はあんなありきたりな文章じゃない。未送信のマークがついたそれを開けて、すぐに削除する。

『ねえ、さっきのメールの宛先、間違ってないかな？ 私はきみが

留学したがっていたなんて、ひとつも知らなかったよ。』

誰かと誰かを繋ぐこの小さな機械はとても便利だ。本当に言いたいことを綺麗にくるんで、ふわふわとした曖昧な世界だけを繋げてくれる。

データフォルダの中には共有した思い出がたくさん残っているのに、めまぐるしく変わる周りに私はすこしも追いつけない。私だけが何も見つけられずに、ぐるぐると思い出の中を歩いている。

もう寝ちゃおうかな、なんて寝返りを打ったとたん聞きなれた電子音が耳に入って、あわてて飛び起きる。画面にはきみの名前がちかちかと点滅していた。すこしだけ悩んで、けれど無視することも出来なくて通話ボタンを押す。

『もしもし?』

久しぶり聞いたその声は、数か月前と全然変わっていないくて。

まるでまだきみが近くにいるみたいに勘違いしてしまいそうだ。

「もしもし。めずらしいね、電話なんて」

『直接言いたくてさ。メールありがとね』

「うん。なんか、ありきたりでごめんね」

『大丈夫！ 十分元気出たよ。それにまだ諦めてないし。なんとか説得してみる』

声だけしか聞こえないからわからないけど、きつときみはいま笑顔で話しているんだろう。あの頃からずっとうらやましかった、きらきらひかる眩しい笑顔で。

夢だとか自分らしさだとか、そういつたいわゆる「大切なもの」をなにも持ちあわせていなかったから、何かを諦めてかなしくなることも無かったけど、私には無いものを持っている人たちがうらやましくて仕方なかった。

どうしたってきみは遠くへ行ってしまっただね。

明るくて、やさしくて、可愛くて、夢を諦めない自慢の友達。きみはきつと、神様の機嫌が良いときに生まれたんだ。そうに違いな

い。

さみしくて死にそう、とまでは言わない。けれどさみしくて仕方ない。どうしてさみしいのかもわからない。左胸がきゅっとしめつけられてうまく息ができない。夢を追うきみの声を聞いて、漠然とした焦燥感に駆られる。

小さい頃は、私にもなりたいたいものがたくさんあった。

お花屋さんにケーキ屋さん、看護婦さんにも憧れたし、ピアノの先生にもなりたかった。

作文を書くのが好きだったから、作家になろうとしたこともあった。

けれど駄目なんだ。天井が見えてしまったんだ。がんばってもできないことがあるって、諦めるのだけがどんどん上手になって、そのうち何もできなくなってしまった。

本当になりたかったのはきみだよ。きみになりたい。

「うらやましいよ。私には、そんな風になんかがんばれることがひとつもないから」

『え？』

「どこかに落つこととしてきちやっただのかもしれない。そういう、大切なもの」

八つ当たりにもなりきれない中途半端な思いをきみにぶつけて、救われたつもりになる私をどうか笑ってほしい。いつも誰かの背中を見て真似をして、空っぽでしかない私のことを「まるで子供みたいね」と笑ってくれたなら。

けど、やさしいきみは笑わない。

『大丈夫、すぐに見付かるよ。探し物見つけんの得意だったじゃん』
受話器の向こうで、やけに自信たっぷり声が言う。

天井の染みをぼんやりと見つめながら、そういえば昔からよく落とし物を拾っていたつけと懐かしい記憶を頭の引き出しからひっぱり出す。

それは机の下に転がるペンだったり、道路の真ん中に落ちている硬貨だったり、駅のホームできらりと光るピアスだったり、いろいろだった。

落とし主がすぐに見付かることもあったし、そうでないときもあった。そんなときは「落とし主が取りに帰ってきますように」と神様だか偉い人だか知らないけれど、とにかく誰かにお願いをしてそのままにしておくしかなかった。

あなたは誰かの探し物を見付けるのが得意ね、と褒められたこともあった。けれど素直に喜べなかった。私が落とし物をよく拾うのは、周りのことをよく見ているからだとか、気が利く性格だからだとか、そういう理由じゃなかったからだ。

下を向いて歩くから、足元に落ちているものがふと目に入る。うつむきながら歩くのが癖だった、ただそれだけ。それだけの話。

自慢できるようなことでもなかったから、人に言ったこともない。それなのに。

「なんで、知ってるの？」

『覚えてない？ わたしのふで箱も給食袋も、あんたが見つけてくれたじゃん』

自分でさえも覚えてなかったことをあまりにもうれしそうに話すものだから、本当になわなない。きみになりたいと言っただけ、前言撤回。私にはきつと真似出来ない。こんなちよつとした一言で、誰かを救うことなんて。

「あつたかいね」

思わず漏れた本音に、きみは嬉しそうに答えてくれる。

『そうだね。今日の最高気温二十度だったけ？』

ちがうよ、きみのこころの話。

(後書き)

追伸、世界は案外やさしくできている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1783/>

リング、ワンデ、ルング。

2010年10月8日15時22分発行